

## 学校事務セミナー報告

### 第1セッション

「私にもできる！自己改革のススメ」

～提案型事務職員への道も一歩から～  
近畿公立小中学校事務職員研究会 調査研究部

去る2月15日京都タワーホテルにて近事研調査研究部による第40回全国公立小中学校事務研究大会（福島大会）の中間報告を行いました。

### テーマについて

平成18年9月にスタートした今期の調査研究部（部長含む13名）は、平成20年8月の全事研福島大会での分科会発表をめざし、テーマの設定や研究内容について論議を重ねてきました。

分科会の形態としては、提案型事務職員となるための第一歩として、自己改革（意識改革）から始めた部員個々の実践事例を中心に報告することとし、「スクールガイドの提案・作成」と「子どもや保護者・地域との関わり」の2つのテーマをベースに実践を積み上げることにしました。

### スクールガイドの提案・作成

スクールガイド提案・作成に向けて、意識すべき項目として以下の3点にまとめ確認。

- 1 スクールガイドを通して、なぜ今「情報発信」をする必要性とは何か？
- 2 作成の取り組みをなぜ私たち事務職員が主体的になってしようとしているのか？
- 3 スクールガイドを作成するという意味・意義とは？

そして、スクールガイド提案・作成の過程で生まれた多くの「気づき」と職種を越えたコミュニケーション。「私にもできるかもしれない」「私もやってみたい」「私も変わってみたい、変えてみたい」をキーワードに。



### 子どもや保護者地域との関わり

「なぜ私たち学校事務職員は学校にいるのか」という素朴な疑問から事務職員の在り方を研究。

子どもたちが見えて、子どもたちのよりよい教育条件整備をどのように進めるのかを原点に。

「事務室経営案」作成で見えてきたもの。

「自己評価シート」と「校内学校事務アンケート」による検証。

実践の前に立ちちはだかる外的な「壁」と内的な「壁」とは。

### まとめにかえて

紙面の関係上、実践報告部分は箇条書きで記載しましたが、「気づき」や「壁」といったキーワードを大切にしながら次のステップへと駒を進めています。

実践を積み重ねる中で、自分の意識が変わる・変える。周りも巻き込んで変える。事務職員として教育にどれだけ入り込んでいけるか、さらにどのように浸透させ広めていけるかがこれからの課題です。

私たちにとって、調査研究部はグループワーク組織として機能しています。お互いが支え合い励まし合いながら、それぞれの地域、個々の職場に新たな学校事務の風を起こすことができていると自負しています。

8月の全事研福島大会では、調査研究部のさらなる進化をご期待ください。

## 第2セッション

講師 首都大学東京大学院建築学専攻  
DHEリサーチフェロー博士（工学）

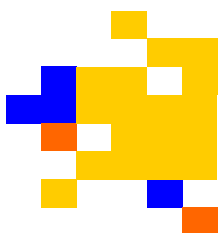
倉斗綾子（くらかずりょうこ）様

「お出かけ散歩道」  
近年の事例に見る学びの空間

近年徐々にではありますが、学校の校舎建物は、「教室」と「廊下」という定型を脱し、様々な学習空間を付加する形で変化してきました。しかし、それらの多くが「教室」という学校の基本単位となる場所を確保した上で、それにどのような学習空間を付加させていくか、という考え方で構成されていたといえるでしょう。

新しいモダンな建物が提案できるようになりました。

全国的に少子化が進み、学校が次々と統合・廃校する時代が訪れています。児童生徒数は年々減少し、空き教室・廃校跡施設の活用、老朽化への対応など、既存の学校を取り巻く状況は、深刻です。そんな時代に新しく建てられる学校は、これまで増産されてきた従来型の学校にはない、新しく創り出される学習空間としての意義が必要だと考えます。



学びを応援するマガジン

ある都市で、教育委員会・教員・保護者・当時の小学生の保護者で新設中学校設置の「中学校教育推進協議会」を結成し、どんな学校づくりをしたいのか検討しました。その検討を経て、協議会では専門家を招いて基本計画を作成し、それを基に、提案や金額ではなく設計者の考え方を選ぶプロポーザルコンペという方法で、設計者の全国公募を実施しました。そこで選ばれた設計者と共に学校、地域がさらなる協議を重ね「魅力ある学校とするためには何が必要か、どんな運営が相応しいのか」を繰り返し積み上げていったのです。そうしたプロセスを経て校舎建築だけではなく、運営・ソフト・子どもたちの活動の面にまで、学校特有の魅力が生まれた例を紹介していただきました。



コミュニケーションスペース

最後に学校改善プロジェクトと題して学校環境（施設や備品等の適切な配置による職場環境の改善）の例をプレゼンテーションで見せていただきました。

職員室は、机と机の間の脇机設置により、教職員間に距離感があり、それがコミュニケーションの妨げになっていたり、職員室が手狭になる原因になっています。また、天井からの配線や、窓をふさぐ書類など、視界をさえぎる物がたくさんありますが、レイアウトの見直し「脇機の撤去」で、教師同士の距離を縮め、すべてが見渡せることでコミュニケーションが活性化し充実してきました。また、職員室に空きスペースができたことにより、カウンターや交流ゾーンが設けられました。それらを利用して、教師自身が生徒に対してもPTAに対しても職員室に迎える意識を持ち、対応が丁寧になったとの報告をきいています。

このように、コミュニケーションづくりのためのスペースづくりが増えてきています。

事務室から提案してみてもいいのではないでしょうか。

